



嘉陵江沿いの重慶市街地

## 馬氏の時間の観念

老舍

(訳 富永涓子)

馬宗融氏の時計は、わたしには一つの装飾品のように思われる。彼は会合の約束に遅れるのはもちろん、食事の約束にもいつも一時間は遅刻するが、それは彼の時計がべつに後れているからというわけではない。

彼は重慶に来るとほとんど白象街（1）の作家下宿に住んでいる。言ってみるところでどうにもならないが、彼は夜中の三時まで話したが。他の人たちがみな眠くなって声が出なくなっても、彼は寢床へ行こうとはしない。話に付き合う人がいれば、次の日の午前二時まで座ったままだ。時計、月、太陽すべてが、彼に時間がきたと注意をうながすことはできない。

たとえば言うと、午後三時に会合のため観音岩(2)へ行かねばならないのに、二時半になっても一向にその様子を見せない。「宗融さん、三時に会合でしょ？行かなくちゃならないのでは」と彼を促すと、彼はすぐ帽子をかぶり、そばにあった茶碗ほどもある太いステッキを持って外へ向かう。みんなが彼に「七時には食事です。早く帰って来てください」と言うと、「必ず帰るよ」と返事をしながらそそくさと出かけて行く。

三時になって外へ出てみると、なんと馬氏は玄関のところで一人のおばあさんや、あるいは二人の小学生と話し込んでいるではないか！ たとえそんなことがなくても、彼は五時前には観音岩には着かないだろう。道で知人に会う度に、少なくとも十分は話をするだろうからだ。

もし掴み合いや言い争いに遭遇しようものなら、彼はなだめに行ったり、別の人に間に入ってけんかを止めさせてもらったりして、仲裁をはじめははずだ。どこかで火事が起きているのに遭遇すると、きっと救助の手助けに行くだろう。スリを追いかけている人がいると必ず加勢して、捕えずにはおかない。何か新しい物を見つけると、必ずいくらで売っているのかと聞きに行く、買おうが買うまいが。劇のポスターを見ると、すぐ電話を借りに行ってまだ切符があるかどうかを問う……このようにして彼は、白象街から観音岩までを一日かけて歩くことができるのである。幸いにも会があることは覚えているので、たった二、三時間で会場に到着し、すでに散会はしていても、また二時間は座って誰とでも話し出す。話はすべておもしろく心がこもっていて、細やかだ。誰かが一本の縄を買ってくると、彼は即座にそれを持って縄跳びのけいこをし始める——五十歳になったというのに！

彼は七時になって、白象街に帰って食事をしなければと思い出す。帰り道にまた、相変わらずけんかの仲裁をし、消火の手助け、悪者を追いかけ、値段を聞い

たり電話をかけたり……早くても八時半位には到着する。顔中汗をびっしょりかき、三歩歩く時間で二歩進み、彼が帰って来たときには食事の時間はとっくに終わっている。

というわけで、我々と友人が彼と時間を決めるときは、どんな時間でもご随意に、早朝でもよし、夜でも又よし、どうせわたしは一日中外へは出ないので、あなたがいつ来てもいいですよ、と言う。我々はこれをすなわち「馬宗融時間」と言っているのである！

(1) 白象街……重慶市渝中区にある古い町並みを残す通りで、印刷所や新聞社、雑誌社があり文学者が多く住んでいた。渝中区は重慶市の西南部、長江と嘉陵江に挟まれた地区で古くから貿易地区として栄え、現在もビジネスや観光の中心地になっている。

(2) 観音岩……白象街と同じ渝中区にある地名。ホテルやレストラン、銀行などが多い繁華街。

(『老舍 散文三十八講』, 吳小美, 語文出版社, 北京, 2014, pp. 115-116.)



## (中国語原文) 马宗融先生的时间观念

老舍

马宗融先生的表大概是、我想是一个装饰品。无论约他开会，还是吃饭，他总迟到一个多钟头，他的表并不慢。

来重庆，他多半是住在白象街的作家书屋。有的说也罢，没的说也罢，他总要谈到夜里两三点钟。追假若不是别人都困得不出了一声了，他还想不起

上床去。有人陪着他谈，他能一直坐到第二天夜里两点钟。表、月亮、太阳，都不能引起他注意到时间。

比如说吧，下午三点他须到观音岩去开会，到两点半他还毫无动静。“宗融兄，不是三点，有会吗？该走了吧？”有人这样提醒他，他马上去戴上帽子，提起那有茶碗口粗的木棒，向外走。“七点吃饭。早回来呀！”大家告诉他。他回答声“一定回来”，便匆匆地走出去。

到三点的时候，你若出去，你会看见马宗融先生在门口与一位老太婆，或是两个小学生，谈话儿呢！即使不是这样，他在五点以前也不会走到观音岩。路上每遇到一位熟人，便要谈，至少有十分钟的话。

若遇上打架吵嘴的，他得过去解劝，还许把别人劝开，而他与另一位劝架的打起来！遇上某处起火，他得帮着去救。有人追赶扒手，他必然得加入，非捉到不可。看见某种新东西，他得过去问问价钱，不管买与不买。看到戏报子，马上他去借电话，问还有票没有……这样，他从白象街到观音岩，可以走一天幸而他记得开会那件事，所以只走两三个钟头，到了开会的地点，即使大家已经散了会，他也得坐两点钟，他跟谁都谈得来，都谈得有趣，很亲切，很细腻。有人刚买一条绳子，他马上拿过来练习跳绳——五十岁了啊！

七点，他想起来回白象街吃饭，归路上，又照样的劝架，救人，追贼，问物价，打电话……至早，他在八点半左右走到目的地。满头大汗，三步当作两步走的。他走了进来，饭早已开过了。

所以，我们与友人定约会的时候，若说随便什么时间，早晨也好，晚上也好，反正我一天下出门，你哪时来也可以，我们便说“马宗融的时间吧”！

